

---

# 世界って広いんだね

椰代

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界つて広いんだね

### 【Zコード】

Z0686Z

### 【作者名】

桜代

### 【あらすじ】

女子高校生なう〜なあたし、ひやま 桧山あお 蒼は模試の当日に寝坊。前日の夜中に「寝坊したら奢ってね」と弟の空に言っていたのに(略)。気持ちを切り替えて車内勉強するあたしに襲いかかってきたのは睡魔、という名のプロローグでした。

考えていたものよりもかなり脱線しました。弟設定を入れたことによつて、予想外のことになると話がうんたらしそうなんで、一応R15出して

ねれまか。

## 1章\* 登場人物（前書き）

あんまり設定気にしないほうがいいかもしません( )

## 1章\*登場人物

\*主人公：桧山 蒼 17歳。女子高生。+@黒髪、黒目

- ・学校では美人のギタリストで人気者
- ・勉強よりも、放課後のバンド活動やバイトが好き
- ・朝は低血圧で機嫌が悪い
- ・恋人は作らない主義（理由有）

\*弟：桧山 空 16歳。高校生。

- ・学校内でイケメンと噂の的。本人興味なし
- ・成績優秀、推薦入学で学校期待の星
- ・朝から爽やかに登校できる
- ・恋人は作らない（隠れシスコン）

+@家族構成：父母（専業主婦）主人公・弟  
+@家族構成：父母（サラリーマン）

- \*案内役：（後に）銀
- ・森の案内をしてくれる
- ・トリップ先ではパートナー

- \*青年：（後に）空
- ・送られる世界の神様

## 1章\* 登場人物（後書き）

たぶん章の区切りごとに登場人物を入れます

## あたしの560円（前書き）

この小説に興味を持つていただけてありがとうございます。  
嬉しいです。異世界トリップって魅力的ですよね！  
よろしくお願ひします

## あたしの560円

「<sup>あお</sup> 蒼つ……起きなセー……遅刻するわよ……」

ある秋晴れの朝。

あたしはいつもどおり母に布団をばぐり、自分の温もりから引き離された。

「いつまで寝てるの……早く立つ……起きるつ……顔洗う……」

ああ・・・いるさこ。低血圧のあたしの頭には母さんの甲高い声に顔を思いっきりしかめた。

言い返そうとしてふとデジタル時計を見、次の瞬間母さんが顔をしかめた。

「は、8時?!

「だからさつきから言つてるじゃない! 遅刻するのよ貴方! 急ぎなさいね」

と言つて、ぱたぱたと部屋を出て行つた。

・・・やっぱい。今日は朝から模試なのに。あたしは頭をフル回転させた。

テストは9時から。学校まで30分。テスト15分前に着席完了。だから準備時間、10分以内。

考えながら制服に腕を通してスカートのホックを留めてかばんを抱えて家を飛び出した。

駅のホームまで猛ダッシュしたが、行つてしまつたばかりなのか。

エントランスの最前列に並べた。ケータイで時間を確認すると、予想より一本早い電車に乗ることができるようだ。

よかつた、遅刻はなんとか免れそう。まだ寝癖が收まりきっていない髪の毛をしばらく撫で付けながら思つていると、電車の到着するときのメロディーが流れた。

扉が開いて、乗客が雪崩のよつに降車する。あたしが乗車する頃には、珍しく乗車シートに座れた。

ああ、間に合つてよかつた。今日は（寝坊して）ついてないけど、（遅刻免れるから）ついてる。

何気なくケータイを開くと新着メールがあつた。弟から。

『寝坊乙b

あと俺、購買のパンセット（560円）ね？』

「・・・」

そう言えば昨日、といつか今日の夜中に、「蒼いつまで起きてんの？」また明日たつき起こされんぞ」と寝坊ゼロの弟にニヤ顔で言われたので「そんなことする訳ないじゃん」と反論して、「じゃあ賭けようか。蒼、寝坊したら奢れよ」と言われ、「じゃああたしパンセット（560円）ね」と乗つてしまつたんだつた。・・・なんてこつた。あたしの買い物費が弟に・・・

とりあえず電車独特の走行音を聞きながら学校最寄駅に着くまでの間、かばんから英単語帳を出して、テスト対策に集中することにした。だがしかし。数十分前まで寝ていたにも関わらず眠い。何故かとにかく眠い。頭を軽く振りなんとか紛らわそと瞬きもする。でも眠い。

馴れなこことあるもんじゃないなあ～ビツセツ終点だし、寝てしま  
わ。

潔く折れたあたしは、単語帳を閉まつてかばんに顔を埋めた。

あたしを呼ぶ声（複数形）

## あたしを呼ぶ声

心地よい風があたしの体を撫ぜる。自分の体が湿った土の上に横たわっている感覚。

あれ・・・? あたしは電車のシートで寝てるんだよね。何故に土・・?

くわづと皿を開けば。

「・・・。エリザベス」

あたしの知らない森。そしてあたしは土の上。

自分、こんな場所で何してるんでしょう。何で森! 電車どこ! 模試はどうする! パンセット売り切る! ... てかビニール袋、もつやだ現実逃避したい。

「・・・。とつあえず誰かに連絡しとけ」

それから2時間ほどだと思つ。あたしは気づかされた。

持っていたはずのケータイはかばんを探しても制服を探しても、どこにもないことに。

連絡手段はなし、と・・・

そこでの岩場に留まっているよりも、自分の勘を信じて現地の人を探すことにした。

日本でこう春の午後3時くらい、だろうか。森は太陽の陽気を

十分に蓄えているせいかぽかぽかとして暖かかい。きらきらとした木漏れ日に癒されながら歩き続けた。

けれどもあたしは女子高生。馴れない森を歩き続けるスタミナは限られている。時間は待つてくれない。気がつけば太陽はゆっくり傾いてきていた。肌で感じる風も冷たい。もうかなり歩いたはずなのに人も、鳥も見当たらない。太陽は沈む手前。

どうして誰もいないのか。急に大きな不安と寂しさが押し寄せてきた。

「・・・」

あたしの体は長時間馴れない森を歩き続けた疲れからか、細い木の根に足を引っ掛け少しひざをすりむいてしまった。立ち上がりつて、汚れを落す気にもなれなくて。その場にしゃがみこみうずくまつた。さっきとは違つた、夜の風があたしの体温を奪つていく。

”蒼”

誰かが自分を呼んだような気がしたのと同時に、家に着いたときのような、安心感が体を包み込んだ。あたしが顔を上げると、

「・・・。」

田の前に狼に似た真っ白の動物がじつとあたしを見つめていたので驚いた。

”蒼”

また、聴こえた。さつもと同じ声だ。耳から入ってくる声でなく、頭に直接響く弟に似た声。

あたしは試しに、どうすれば帰れる、と单刀直入に問いかけた。

”・・・田の前の彼について行けばいい”

間を置いて声の主から返事があつた。

わかりました、と返事をし、次いで田の前の白い狼と田を合わせる。

狼はあたしの田を見るときちんと瞬をしたから、ぐるつと脚を向けて歩き出した。

悪い感じはこれっぽちも感じない。あたしは迷わずその背中についていった。

## あたしを呼ぶ声（後書き）

ありがとうございました。  
よければ感想、聞かせてください（< ^ >）

声の主は予想外（前書き）

私も予想外です。

## 声の主は予想外

辺りはすっかり暗く静まり返っている。でも、白い狼を見失つてしまふことは一度もなかつた。

ところどころの案内役、狼つて言つちゃつていいんだろうか。それはもう真っ白なすんばらしいキュー・ティクルの毛並み。馬ぐらいの大きさで、ふつさふさのしつぽが何故か2本。

うん、わかりやすく例えるとジーリのヤマイヌさん。実は彼も山の主だつたりして。

歩くたびに揺れるしつぽを見ていると、心が和む。でも、しつぽが2本もある大きい狼なんて、DVDでしか見たことがない。いるはずもない。今思い返せば、今から会う声の主も謎だ。そもそもあたしはいつテレパシー能力に目覚めたんでしょう。顔も知らない誰かと普通に会話しちゃつたけどさ。

「・・・。」

そこまで行き着いてあたしは考えるのを止めた。だつて今から会える声の主は、きっとあたしのことを知つてる。あたしが電車に乗つていて、こんな状況になつちゃつたミステリーも知つてる。といふか、もしかすると関係者かもしれない。何はともあれ会つたら全部聞き出そう。

しばらくして、森がひらけて大きな湖が見えてきた。月は出てい

ない。星が、輝いている。あたしには大地が煌めいて見えた。なんて神秘的なんだろう。足を運ぶのも忘れてあたしは立ち尽くした。

案内役の彼は湖の傍まで行つて、後ろのあたしに向き直つた。じつとこちらを見つめてくる。

こつけだよと言わたよつの気がしたから、あたしも彼の隣まで歩み寄つた。

「うわあ・・・・・綺麗・・・・・」

宝石がちりばめられた水面を覗き込むよひにしてかがむと。

「蒼。待つていたよ」

「えつー・? わつ・・・・とー」

突然傍で生身の声がしたので驚いて体勢を崩してしまつた。

湖に落ちるーと田を瞑つたけど、ぐいっと強い力で引き上げられる。

「いやあ、危ない危ない

苦笑が混じつた声の主の声。あたしが恐る恐る顔を上げると。

「・・・（う、わあ、綺麗）」

動搖で声がでなかつた。若い青年だ。弟に似ている、よつな気がする。でもあたしが一番目を惹かれたのは翡翠色の目。日本人をやつてるあたしにはもちろん縁がない色で。そもそも外国人で翡翠色の目の人なんているんだろうか。

いやいや。見惚れてる場合じやないよ自分。この人には聞きたいことがたっくさんあるんだから。

「と、と、と、何處ですか？ あたしを地球、日本に返してください」

と田を見て单刀直入に聞いた。大丈夫。この人には全部わかってる。たぶんだけど。今は初めてのアローンサバイバルで極度のホームシックなんだ。言葉足らずは堪忍してください。後はもう今すぐ家に帰りたいです。

声の主はと、あたしと田が合つた数秒間、目を見開いて硬直していた。そして次の瞬間、くすりと声を出して笑つた。

「・・・何がおかしいんですか」

疲れていて早く返りたいあたしは声の主を睨んだ。

「「」が君のいた世界じゃないってことはもうわかつてるんだね。悪いが蒼を元の世界には返せない。蒼、君は元の世界では他界しているんだよ」

「え・・？」

「君は朝、寝坊して遅刻しそうになつて電車に乗つた。その電車が事故に遭つたんだ」

「・・・」

「・・・。おいで。見て」覧」

青年は湖に近寄つて、水面に片手をかざした。すると水面に家族が映る。父さん、母さん、友人達。皆が喪服を着て順番に手を合わせていた。弟は見当たらなかつた。そして祭壇の上には、あたしの笑う写真。

「君は本来、命の流れにしたがつて他の命たちと魂の川を廻る筈だつたんだけじね・・・

俺がたまたま見つけたんだよ。だから捕まえて連れてきたんだ。

「

「・・・どうこう」と?」

青年の説明日く、命は廻り、ある一定の周期がやつてくると、どこの世界に根付くらしい。

そしてあたしはある電車で死んだ後その周期に乗つて廻り始めるところを、この人に捕獲された、らしい。まさか自分が他界しているつていうのは予想外。この人に連れてこられたっていうのも予想外。

もうどうでもいい。全てが予想外なんだもん。

「とにかく蒼、今度はいつの世界で生きてみる気はない？」

青年は真剣な目であたしに尋ねた。何があるのかと思つてあたしも真剣に返した。

「…………あたしに何か役目があるんですか？」

「え？ 役目なんてないよ。俺のわがままだし」

—  
・  
・  
・  
え  
?

さらつと言った。今この人さらつと言ったよ！わがままって！わがままって何！！

動搖が顔に出たのか否か、青年は宥めるが、口は続けた。

「ははつこ」は俺の世界なんだよ。蒼に行つて欲しい世界つてこ  
こじやなくて、

・・・待て待て待て。あんたが神さま?「

ど。  
弟に似ている分、信じらんねえですよあたしは。  
何か怖いんだけ

「いやだなあ蒼。行けばわかるよ行けば。そう、行ってみなくち  
や わからない」「

態度が「ロロロロ」変わる青年の顔はもはや神と思えず。弟の外国人バージョンに見えてしまつ。

うん、青年のそれは、弟のシニカルな空にそつくりで。

「君は俺の波長とす」べ相性がいいんだよ。これも何かの縁と思つてさ」

青年は呆然とするあたしを見て、面白いのか何なのか。とにかく笑いが止まらないらしい。ツボに入ると中々抜け出せないところもそつくりである。ますます弟に見える。

「ふ・・・あはははっ！ダメだもう俺もう説明無理」とりあえず俺の世界に送つてあげるね？

心配しないで。ちゃんと必要な知識は行く前に伝えるからね。ああ・・・嫌なんて言わせないよ。俺と相性の合ひ魂なんでもう随分巡り会つてないんだから」「

拒否権ナシつてか。しかも後半から青年の言葉は急に声色が下がつた。それに目がなんていうか・・・獸・・・？身の危険を感じて後ずさるには遅かつた。

「・・・！」

はつと気づいたときには腕を引き寄せられ、腰に手を回され、顎先をつかまれ顔を持ち上げられていた。・・・何この恋人的状況。顔が弟と似てるせいか全然ときめかないんだけど。

「はあ、鈍いなあ、、ちゃんと警戒してよね。・・・蒼姉さん？」

「え？！つて空？！ な・・・んつ」

確認する前に唇を重ねられてしまった。

そこから何か、大きな力のようなものと、空が神であらう国に関するいろいろ歴史、知識、全てが鮮やかに流れ込んできた。あたしは青年から伝わるそれに驚いて、手で押し返そうとしたが、やんわりと止められた。そして大量の情報に頭痛がしてきた。

あたしは、意識を手放した。

声の主は予想外（後書き）

“どうじょりゅうか”／予想外に・・・！

送られたといふが落された。（前書き）

蒼は犬が好きです

送られたといふが落された。

あの青年に初めての口付けという形で世界に関わる情報を得たあ  
たし。

まだ夢のようなふわふわとした感覚の中。あたしはその情報を大  
方にまとめるところだ。

まずキスしてきた変態兼青年。あれは日本で生きていた弟の魂の  
半分らしい。

何で半分かなんて突つ込まない。頭に入ってきた情報はややこしく  
て、思考回路単純なあたしには説明できません。とにかく弟だと言  
われたので空と呼んでいいか、と尋ね承されたのでよし。弟にキ  
スされたのかという危ない線もノーカウントでいこう。口付け以上  
の線は超えてないもん。

次に森で案内役をしてくれた彼（大きなおおかみもどき）。  
あたしと一緒に送られるらしい。空へイイパートナーになつてくれ  
れるだろうから、名前も付けてやって、だつて。うんわかったよ。  
ぴつたりの名前考えるね。

そしてあたしが送られる世界。5つの大きな国で成り立っていて、  
東に水の国、西に風の国、南に火の国、北に地の国。そして中央に  
天座あまざ。あとは日本でもよくあつた某ファンタジーに似ている。ギル  
ドが存在し、モンスターもどきが居て、魔法が存在する。

その他、かくかくしかじか。そこら辺はレッツ経験、だそうです。  
そして最後に

”いつも見守つてゐよ、蒼。”

そんな言葉を残され、あたしの意識はそこで背中に衝撃を感じることで遮断された。

「いつ！たーい・・・」

あたしは柔道で背負い投げされたような痛み（されたことないけど）に顔をしかめながら体を起こした。見渡せば周りはとにかく白。教会のような細工の石造りの壁、柱、祭壇。いくつかある小さめの高い天井窓から光が差し込んでいる。ここは天座に存在している神殿だ。そして祭壇の上にはまさかの巨大な弟像。しかもありえないほど白いエングルスマイル。

”いつも見守つてゐよ、蒼”　ふと、空の最後の言葉が頭をよぎる。

空の言葉を思い出し、お前はどうぞのパソコンかと眉間にシワを寄せていたところ、ふしうんと鼻息を横からかけられた。振り向くと案内役の彼がじっと見つめている。

「う、うめんうめん…空の白い笑顔、小さこじり以来見たことなかつたからさ…・・・」

思わず本音が出てしまつて言葉につまる。彼はじつと聞き入つて、

あたしを見つめたまま。やけでふと思に出す。名前、あげるんだつた。

「・・・」

「・・・」

しばらぐ無言でお互いを見つめ合つ。あたしは田の前の彼をじつと観察して気づいた。彼の毛並みは神殿の白に屬していない。彼の白はもつとじう、なんといつか・・・

「銀・・・?」

に近い気がする。彼の耳がくいくいと動き、ふあさり、2本のしつぽが揺れたので、

「銀

はつあつと呼べば。彼は近寄つて頭を擦り寄せてきた。やわらかうした毛並みとじんわりくる温もりに自分の頬が緩むのを感じた。

「銀、あつたかいね」

立ち上がつて銀の首に手を回し、ぬくもりを確かめるよひに、顔を埋めると安心感に包まれた。

しばらぐそうじてみると、銀がぴくりと反応し扉を警戒し始めた。何かと思い耳を澄ませば慌てたような複数の足音、話し声が近づいて来る。あたしは顔を上げて隠れられるような場所は無いか探した

けど、ここは神殿。見晴らしがよすぎる。あたしはまだしも銀も隠れられそつな場所は見当たらぬ。

あたしは頭をフル回転させ対応を考えた。

相手は味方じゃないからあたしは何をされるかわからない。ここは隠れる場所なし。扉は一つ。とすれば、できることも一つ。

「銀。逃げるよ」

あたしの考えを察してくれた銀は、あたしを背に乗せ、祭壇のほうへ移動し、扉に向かつて身構える。ばたばたと足音は近づいてきて、扉が一瞬光った瞬間。

「今だ」

あたしの合図と同時に、銀は扉に向かつて駆け出した。

送られたといつが落された。（後書き）

走れ銀

銀が駆け出した瞬間、あたしたち田掛けて黄色く光る鎖が伸びてきて、巻きつこうとする。あたしはぎゅっと田田を握り、銀は鎖を避けようと地を蹴った。しかしぬの瞬間。

「逃がさん……」

声がしたと思った瞬間、あたしと銀は別々に鎖に巻きつかれ、引き剥がされ、硬い床に叩きつけられた。あたしは呻きながら銀の様子を見ようと上半身を起こそうとするが、鎖からビヨビヨッと電気のようなものが体を流れた。

「つたあー何これ……」

痛みに耐えながら銀を探すと、少しはなれたところに銀も同じようにはまつて……いかつた。

彼は数人の魔術師っぽい方々相手に、唸つて威嚇している。銀、強いい！と感心していると、いきなり後ろから抱え上げられ、立たされ、背中から引き寄せられ。後ろから抱きつかれる状態になつている。

「動けば命はない

耳の傍で囁かれた。声の低さ、背中に感じる硬い胸板から男だとわかる。動かないでいると、男が再び口を開いた。

「鎮まれ！…」の女がどうなつてもいいのか…！」

「！ グルウウウウ・・・・ガツ…！」

銀はあたしが捕まつていると解つた途端、なんと魔術師っぽい人たちをあつという間に飛び越え、こちらに突進してきた。目がマジで怒っている。男は止まらない銀に舌打ちして、片方の手を前に出し、咳いた。

「天の盾よ」

すると手のひらから水の波紋のように淡い波のよつなものが、ドーム状に男とあたしの周りになされた。銀はそれにぶつかる手前でなんとか立ち止まるが、男に対する威嚇は止まらない。

「ふむ。魔術師共、手を出すな。そのままでいてくれよ・・・さて女、嘘はつくな。

何故ここに、何の目的で、どうやって入った

男とあたしの姿勢は抱えあげられた時から変わつていない。つまり、あたしと男は威嚇している銀のほうを見ながら、あたしは後ろから男に抱かれているままである。2人とも銀のほうに向いた奇妙な体制のまま会話は続けられた。

「・・・知らないです。意味も、目的も、方法も」

だつていきなり送られたからね？拒否権ナシで。まさか初っ端から捕まつて悪者扱いされるなんて思わなかつたよ。空のやつ、覚えてろよ。

「・・・」

男は無言であたしの肩をつかみ振り向かせた。あたしと男は向かい合わせだ。

「・・・」

「・・・」

男の田は、あたしの田捉えた瞬間、見開かれて動かなくなつたので、危害はないことを伝えようと囁く。先手必勝。

「あたしたちは敵じゃないです」

男の田をまっすぐ見て囁く。嘘じやないんです、解つてくださいと田力を込めて。

田の前の男はあたしの声に我に返り、驚いたように何度も瞬きをして

「信じよう」

と言つてくれた。よかつた。これで牢屋行きはないだらう。変な拷問なんかもなさうだ。あたしはまつと溜め息をついて、銀を振り返つて微笑んだ。

「銀、だいじょうぶだよ」

銀はそれまで男を睨んでいたが、あたしがだいじょうぶと囁つて人の警戒を少し解いた。

それを確認して、あたしは再び男に向を直つた。

「信じてくださいってありがとつ。あたし蒼つていいます」

「……ディールだ。天座の長をしている」

ええ、知っていますよ。空から情報は貰つてますから。

「……ディールさま」

周りの魔術師達がおずおず申し出た。

「わかっている。アオ、敵ではないと信じるが、  
お前は私の張った結界にやすやすと入り込んだ。どうこうこと  
か解るな？」

「……はい」

いや、わかりたくあつませんけどね。

## 見逃してはもらえない

あれから魔術師は残つてその場の処理に、あたしと銀はディールの書斎に転送された。

いろんなジャンルの本がところ狭しと棚に並んでいる。立ち廻りしていると机の前にある長ソファに座れと促されたので素直に座った。銀は後ろに座つてじつとディールを見つめている。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

彼はあたしたちを探るように見つめたまま口を開く様子を見せない。あたしは切り出し方がわからないので黙っている。銀はゆっくりと瞬きを繰り返しながらディールを見つめている。

「・・・もう一度聞こう。アオ、何処から来た」

あたしは全て話すべきか否か迷つた。

ディールは敵ではないと信じてくれたけど、あたしの味方ときまつたわけじゃない。本当のことを話すのはためらわれた。でも敵じゃないと信じてくれた彼に嘘はつきたくないかった。

「・・・今は話せません」

「・・・ふむ」

彼は見つめていた目を少し伏せて考えるそぶりを見せ、もう一度私を見た。そして

「・・・アオの<sup>オーラ</sup>気は変わった色をしている」

ぼそりと呟いた。

「<sup>オーラ</sup>気」とは簡単に言うとこの世界で誰もが生まれながらに持っている、素質のようなもので、大きく5つに分かれている。天・火・水・地・風という属性があり、それは住んでいる土地の力の影響で現れる。

「・・・知っているだろうが気は我々が生まれ育つ土地の影響で身につく力だ」

天は中央に位置する都。そこで生まれ育つものは天の気に大きく影響されている。

天の右、東は水の都。同様にして水の気に大きく影響されている。天の左、西は風の都。同様にして風の気に大きく影響されている。天の上、北は地の都。同様にして地の気に大きく影響されている。天の下、南は火の都。同様にして火の気に大きく影響されている。

気の色も属性によつて異なり、天は黄、火は赤、水は青、風は白、地は橙。

デイールは天の気だろう。彼が使つた鎖は黄色に光つていたから。力の内容は気の種類でだいたい想像できる。

「アオの気はどの属性だろうな。俺は生まれてからその色にお目

にかかつたことがない

「・・・」

そう、あたしの気の色はどの属性にも属さない緑色だ。ちなみに何の気かといふと命の気。

これは生命力の力そのもので、この世界の神様である空の氣だ。もちろん彼には話さない。とりあえず黙つておこう。

「さて・・俺の結界を割つて入つた件だが。あれを破いて中に入つたのはアオが初めてでな」

話題が変わり、デイールの顔つきが変わった。口角が上がり綺麗な弧を描いている。しかし目が怖い。切れ長の翡翠色の目がどこか楽しげにあたしを見ている、よつたな気がする。たぶんあたしの顔は今かなり引きつっているだろ？

「・・・そなんですか」

「ああ、そうだ。あそこは神聖な場所で普通立ち入り禁止だ。アオは不法侵入したことになる。

それで・・・どうしようかな？」

「・・・」

「ひとつと問われ、あたしは顔がさらに引きつるのを感じた。

## 話が進まない

ディールの笑顔は上に立つもの特有の迫力、そして美形というオプションがついているためにかくいろんな意味での迫力がすごい。

今思い知らされている。あたしはとにかく、本当に「めんなさい、何も知らないんですけど懸命に弁解していた。

「そのぐらいにしなさい、ディール」

ふいに知らない声が降ってきたので驚いて振り向くと人が立っていた。

第一印象、青。肩まである髪も優しげな眼差しも透き通るような青い色をしている。そしてその人と目が合つた瞬間、あたしは水の中に居るような錯覚に襲われた。

呼吸を忘れ、しばらく動けないと

「そのぐらいにしてやれ、シー」

今度はディールが青い人に言った。

青い人はあたしに微笑んで、あたしからディールに視線を移した。あたしはあの錯覚から開放されたので、深呼吸をして、落ち着くため傍に伏せている銀に手を伸ばした。銀は目を瞑ついていたけどたしが触れるとき遣うような視線を送ってきた。だからちょっと驚いたよ、と微笑んで銀の頭を撫でてやった。銀はそうかと返事をす

るゆつにゆづくつ瞬いてからまた目を開つた。

ディールのほうに姿勢を戻せば、隣に青い人が座つてこちらを見つめていたので、反射神経で目をそらす。青い人はふとやわらかく微笑んで口を開いた。

「ああ、嫌われてしましましたね。お嬢さん、先ほどはいきなり見てしまってすみません」

「・・・視た？」

さつきの錯覚のことだろうか。何を視たんだろう。

「貴方が嘘をついているかいないかです」

あたしがまた聞き返そつとする前に、ディールが口を挟んだ。

「シー、待て。先に紹介をしよう。

アオ、こいつは俺の幼馴染のシー。本名はシーザントだ。今は俺の助手だ」「私は宰相です」

・・・で、シー、こつちがアオ。

さつき俺の結界を破つて進入した敵だ「私敵じゃないです」「冗

談だ」

「・・・」

あたしとシーザントはしばらく無言だつた。

ディールは何が面白いのか、にこにこしている。あたしは無言で、ディールを睨んだが効果は無かつた。

その後シーザントは水の都出身で、占いなどの術を使うのに長けており、そのため道具を使わずとも相手を占つたり見極めることができるとこ'うことを本人の口から聞いた。

あたしとシーザントはお互に軽く会釈して、話に戻った。

「……よしアオ。お前しばらへここに面お

「……え?」

ディールのいきなりの提案に聞き返す。

「ああ。お前のオーラ気はとても珍しいだろう。他に存在するものがあるかないか。

だから俺はしばらへここで様子を見たい。いいな

「……わかりました」

この声には何故か逆らえなかつた。

あたしとシーザントの声がはもつた。ディールは満足そうに口角を上げる。

「シー、彼女に部屋を。あと神殿のほう、それにこれと同じオーラ気があるか調査ね」

ディールが言うと隣に座つていたシーザントの微笑がふつと黒くなつたように見えた。

「……わかりました。部屋はすぐ用意します。ディール、この

仕事頼みますね？

「今日中に終わらせてください」

彼は執務机の仕事に田配せし、次いであたしに微笑んだ後、仕事の山を振り返つて固まっている『ディールの隙をついて消えた。転移魔法っぽい。

「・・・あれを今日中?シーザーの奴、狙つてやがったな・・・」

ディールはしてやられた、という顔で溜め息を吐くと、ソファから立つて執務机に向かい、あたしに「そこで待つていろ」と言うと黙つて仕事に取り掛かり始めた。

あたしはディールの邪魔をしないようにそつと立ち上がって銀の傍に行き彼の首元に顔を埋めた。

そのまま首に抱きついてもたれかかる。銀は嫌がらず、ゆっくり瞬いてアイコンタクトをしてきたのであたしも合わせてアイコンタクトした。何度もしているうちに心が安らいで、眠気が襲つてくる。

「・・・”銀・・・空、あたしどんなひちゃうの?..”

「つづつづらしながら、あたしの意識は沈んでいった。

## 話が進まない（後書き）

タイトルどうぞ・・・話が進まないー・・( )

「シ、シ、シ、シ、シ」

心地よく揺れながら耳に入る足音。布がこすれる音。

・・・・・。おしゃのおしゃの田をひらぐと

「おや、起きてしましたか」

あたしの上から残念なつた声が降ってきた。・・・降つて、きた?

そして自分の体勢に気づく。ティールの執務室で銀に抱きつき寝ていたはずが、いつの間にかあたしはシーザントに抱えられ運ばれていた。

「・・・オハヨウゴザイマス」

「おはようございます」

窓から日明かりが入ってきて、動搖で出てきた田覚めの挨拶にも丁寧に返してくれるシーザント。でもおひさわる気配がない。

「遅くなつてすみません。今から部屋へ案内しますよ」

シーザントはあたしを抱えたまま進んでいく。誰にもすれ違わないが恥ずかしいことこの上ない。

銀はシーザントの後ろから大人しく着いて来ていた。

「シーザント、さん、ありがとぅ・・・あたし自分で歩けます」

「シーザントでいいですよアオ」

「・・・はー」

シーザントは立ち止まりとあたしを下ろしてくれた。その時のじぐわが窓からの月明かりに照らされてとても綺麗だった。

円に照らされる青つて綺麗・・・歩く後姿は絵になると想ひ。

彼の後姿をじっと見つめていると

「アオ?起きてますか?行きますよ」

ふつと振り返って微笑むシーザント。浮世離れしてるとシーザント。綺麗すぎる。

でも言つのは少し気が引けたので、はいと答えて先を歩くシーザントの後を追つた。

「ハハハです」

「おー・・・

やう言つて連れてこられたのは、天井が高めの部屋。ちょっとシールームに来たような気分だ。

ベットにソファや洗面台と、一通りの生活様式が整っている。

「 」 から用があれば私が呼びに来ます。それまでこの部屋で過（）してください。

食事は部屋に転送します。それを食べてください。アオから用があれば中の鏡で私に連絡を。

鏡に立つて名前を呼んでください。あと、部屋からの外出は禁止します。

さて、質問はありますか？」

・・・ せいや。ひつと待て。つまつそれつて軽く

「監禁・・・」

「 そうともいえますが部屋がいいでしょ？ 実際の監禁部屋はもつと色々とす」 ですよ。

何なら見に行きますか？ 今から

「 」

さらりと笑顔で言い切った宰相 黒い。黒いよシーザント。あたしの筋はびしつと伸びた。

「 ありませんね？ では今日はこの辺りで失礼します。疲れてらつしゃるでしょ？」

ゆづくつ休んでくださいね

やわらかく、けじどこか黒く微笑んで宰相は部屋を出て行った。

銀は視線だけでシーザントを見送っていた。彼はすでに部屋のソ

ファの傍に伏せ、しつぽをぱた、ぱた、と揺りしている。そのまま目を瞑り、寝る体勢に入っていた。

銀を見ているとなんだか考えるのも面倒くさい気がしてきた。

「・・・あたしも寝よ」

あたしはベッドに行かず、銀の首元に抱きつく。  
伝わるぬくもりを感じていると、だんだん意識も薄れていった。

## 9話（後書き）

すみません。話が進まないのでサブタイトルがつきません（涙）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0686z/>

---

世界って広いんだね

2011年12月26日22時01分発行